今月の読み物

巨樹・巨木シリーズ-14　神奈川県の巨樹・巨木

細田木材工業株式会社
顧 問　　細 田 安 治

◇はじめに

本稿に写真と資料を提供してくれているU氏は、とどまるところ知らずの元気者、早朝から元気にウォーキングに励んでいる。久しぶりに顔を合わせたが、U氏の巨樹探訪シリーズはますます佳境に入り、５月には四国全土を走破し巨樹を訪ねたと聞く。筆者は四国の巨樹にも逢える楽しみが増えた。

さて今号では神奈川県の巨樹・巨木を訪ねる。

◇神奈川県とは

首都東京圏の西側に位置し、北は東京、東は大きく広がる東京湾、南は相模湾に面し、西は箱根丹沢から山梨､静岡につながっている。このため地形的に変化に富む県といえよう。人口数は900万人で全国第４位、県の力を象徴するGDPは東京、大阪、愛知に続き４番目を走り、海に面した港湾工業都市として活力にあふれている。また県庁所在地横浜市は、幕末開港以来の歴史を誇り、異国情緒あふれる首都圏の玄関口として世界的にも有名である。

また県内に３つの政令指定都市（横浜市・川崎市・相模原市）を有する全国唯一の県でもある。特に横浜市の人口は約370万人であり､日本の基礎自治体の中で最大の人口を抱える。一方で東京都区部（23区）に通勤通学する人も多く、県内の昼夜間人口比率は90弱程度である。他の首都圏の政令指定都市と同様で、横浜市・川崎市・相模原市の３市も昼夜間人口比率が100を下回るなど、県内全域が東京のベッドタウン（衛星都市）的な性格をもつ。（神奈川HPより）

◇神奈川県の県木

神奈川県の県木はイチョウ・ヤマザクラ・ケヤキ・シラカシの中から県民の投票によりイチョウに制定された。また、県の木「イチョウ」を含めて著名な樹木が数多いと見え、探訪者U氏は、37本の名木を選んでいる。全数ご案内したいが、紙面の制約もあり、神奈川県シリーズでは数回に分けて進めていく。

◇建長寺のビャクシン（柏槙）

写真番号１

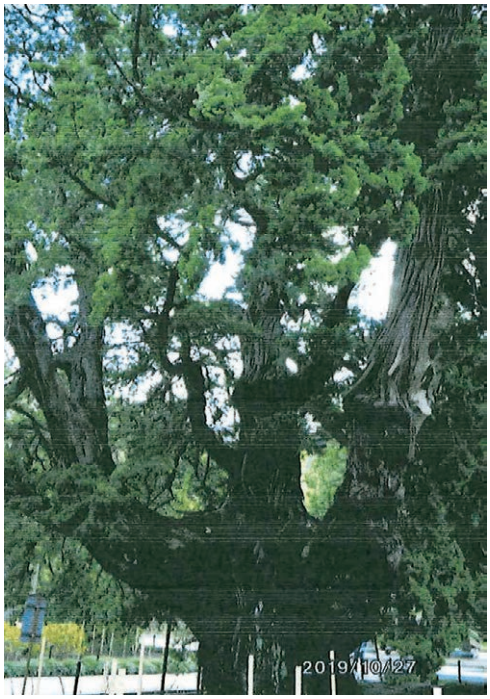
樹齢750年（推定）、樹周6.5m、樹高13m、鎌倉市山ノ内８　鎌倉市指定保存樹木　かながわ名木百選

このビャクシンは、開山蘭渓道隆（らんけいどうりゅう）が中国から持ってきた種子を建長寺創建の際に蒔いたといわれる。樹勢も旺盛で県下の代表的名木として知られている。イブキとも言い東北南部から九州の海岸地帯に生える常緑高木で、神社仏閣や庭園などによく植えられ、特に禅寺では象徴ともいえる樹木である。（建長寺掲示板より）

筆者のつぶやき

幼樹は、海辺に立地した工場地帯の義務緑化木としてクロガネモチとともに重宝がられていた。放置すると枝分かれが激しくなるが、建長寺のビャクシンは、根元から数ｍ上がって激しく三つに分かれており、珍木を通り越した樹相（じゅそう）は厳しく、こちらへ迫ってくるように感じた。奇木というか厳木（げんぼく）と勝手に命名したほどの迫力である。

また、ビャクシンはＵ氏の資料より筆者が選んだ17本中３本もある。千葉県とともに神奈川県にも素晴らしいビャクシンが数多くあることを発見した。



①建長寺のビャクシン（柏槙（びゃくしん））

◇臺谷戸（だいやと）稲荷の森　タブノキ

写真番号２

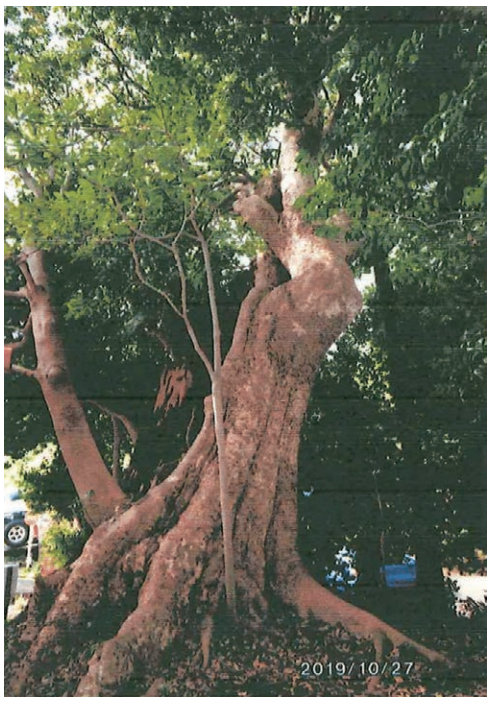
樹齢300年、樹周14.0m、樹高14.0　藤沢市大庭1809　市指定天然記念物

中央に稲荷神社が鎮座する森、このあたりの台地上はダイ（臺）、北側の谷はヤト（谷戸）と、通称されているので臺谷戸と呼ばれる。なかでもタブの木一株は、幹回り約６ｍの巨木、樹高はかって18mあったが、老朽化により、平成８年（1996）に東側の大枝が折れてしまったが、地上１ｍで双幹になっている部分があり原形を保っている。（藤沢市教育委員会資料掲示板より）

筆者のつぶやき

タブノキとはクスノキの一種で九州地方に多く植生している、と理解していた。関東にもタブノキが植生していることは想定外（最近の政治家や役人が使うはやり言葉）。なのでネットで調べると、タブノキとはクスノキ科タブノキ属の常緑高木、別名イヌグス・タマグス・クスタブ・ヤブグスとも称される。まれに山地にもみられるが、海岸近くに見られることが多い木。 幹は垂直、樹周10m超にも成長する。古代に朝鮮半島から渡来した丸木船は全てタブノキで造られたほど日韓交易に貢献しているといわれているほどよく使われた、と言う。逆に言えば、材質はクスノキに似ているものの、やや硬いため「イヌグス」とも呼ばれ、今では葉と樹皮は線香の原料としても利用されているようだ。

漢字では、椨の木・椨と書くが、木へんに府と書き、タブと読ませたのであろう。今どきの横文字の羅列は理解できず閉口しているが、これは秀逸で面白い表現である。昔の人はたとえが上手ですぐに理解できる。（ウィキペディア等を参照）



②臺谷戸（だいやと）稲荷の森　タブノキ

◇鶴嶺八幡の大イチョウ

写真番号３

樹齢950年、樹周9.47m、樹高23m　茅ヶ崎市浜之郷402　鶴嶺八幡　県指定天然記念物　かながわ名木百選

多数の側枝が繁生しその数十本が癒着して成長幹を形作っていると推定されている。癒着したと思われる部分が縦の線となって認められている珍しい巨木である。（案内板より）

筆者のつぶやき

この大イチョウは、細い株が寄せ集まり、しかも直材ばかりで見上げるほどの高さまで枝がなく天を突いている。巨樹・巨木シリーズのイチョウは、ほとんどが乳根大きく垂れ下がり、人生にくたびれ果てた翁を見る思いであった。しかしこのイチョウのまとまって伸びた姿には感動した。この樹の高さのほぼ三分の二まで直材が集まっている。このような直材の集まったイチョウは非常に珍しいため、このイチョウを取り上げた次第である。

③鶴嶺八幡の大イチョウ

何本もの複数の細い木が集まってその集合自体で見る人に何かを語りかけてくるような印象をも覚えたのである。この樹に逢い「何を語りかけているのか。何が言いたいのか」と確かめてみたい気分である。行く機会があればこの大イチョウの前に立ち、正面から見てみたい。

◇有馬のハルニレ

写真番号４

樹齢350年、樹周8.5m、樹高16.0m　海老名市本郷3681　県指定天然記念物　かながわ名木百選

このハルニレは徳川幕府のご典医であった半井驢庵が嘉永年間にこの地に構えた屋敷内にあったと伝えられている。樹種がわからないので「なんじゃもんじゃ」と呼ばれ親しまれてきた。ハルニレは北海道から九州の夏緑林帯に分布する落葉高木である。大きい木には樹高45m、胸高周囲８メートル、樹齢600年に達するものもあるといわれている。（掲示板より）

筆者のつぶやき

ニレの木には思い出が多い。

ニレがケヤキの代用として役に立ったのを思い出した。筆者小僧時代には、ツキ板や化粧合板、銘木合板、床の間材、床の間セットの製造を手掛けていた。ケヤキによく似てやや木目が柔らかい難点はあったが、ケヤキは集めるのが大変

④有馬のハルニレ

だったため、ニレを使ったのである。というのも、当時の高度成長期にはとにかく材料を人より早く買い、人より早く作り、人よりわずかに安い価格設定をすれば飛ぶように売れた時代であったからである。

特に床の間材、床の間セットなどは、製造に時間がかかる。原木を仕入れ、ツキ板に加工し、化粧合板にして、床の間材を作る。製造のすべが順調に運んだとしても１か月近くの時間を要する。これでは商売にならないので、業者さんにコラボレーションをお願いする。しかも数多くの業者さんとコラボレーションして一気に作り、納品する。ここから先がさらに難しい。専門業者の銘木やさんへまとめて納めてしまえば楽な話だが、これでは利幅が少ない。そうかといって小売していては効率が上がらず経費ばかりかかる。難しいこのへんは永遠のテーマである。

ニレのもう一つの思い出は新木場移転当時の街路樹の話だ。移転直後は何もなかったが、数年後に植えられたのがハルニレであった。

筆者の会社の目の前にハルニレが植えられた。成長が早くすくすく伸びて二階の窓の正面まで伸びてきた。このハルニレの葉っぱにアメリカヒロシトリと称する外来の毛虫が付き、むしゃむしゃと柔らかい葉を食べて、たちまち丸坊主にされた。東京都の植木屋さんに防虫を頼んだが、通常の防虫剤では駆除できず排除できなかった。ところが翌年新しい新芽が出てきたのである。ハルニレの生命力に感動した思い出である。

◇巨樹・巨木のこぼれ話　カイノキ（楷樹）

余談だが、新紙幣発行に伴い、渋沢栄一にまつわる学問の樹として知られているカイノキをご紹介したい。20年ぶりに３種類の新紙幣が発行され、１万円札には渋沢栄一が描かれている。ここで思い起こすのは、飛鳥山公園にある旧渋沢邸のカイノキのことである。渋沢は日本資本主義の父と仰がれ（「論語とそろばん」）つまり学問と実業という二つの相反することを実業家として両立させている。

カイノキのいわれは、孔子の墓所にあり「学問の聖木、孔子の木」と呼ばれていたこと、また、枝が直角に枝分れし、葉も直角についていることから、書道の楷書にちなみ、楷の木と名付けられたともいわれている。 カイノキの伝来は、大正四年（1915年）に林業試験場の白沢保美林学博士が、孔林を訪ね、種子を持ち帰り、林業試験場で幼苗を作り、この１株が、渋沢栄一翁の飛鳥山邸に植えられたとのことである。（ウィキペディア等を参照）

筆者の知るもう一か所のカイノキは、岡山県閑谷（しずたに）学校のカイノキである。閑谷学校とは寛文10年（1670）に、岡山藩主池田光正公が学問の府として創建した。自藩の子弟のみならず領内の子弟も受け入れた庶民のための学び舎でもあった。カイノキは、閑谷学校の中心である聖廟の両脇に二本植えてあり、どちらも幹の太さが２m、高さ約13mに達している。孔子にちなんで、閑谷学校では、「カイノキ」を『学問の木』と呼ぶようになった。つまり、日本で最初に『学問の木』と呼んだのは閑谷学校が最初ということである。二本の立派なカイノキは、学び舎にふさわしく350年余を経ているが、現在でも、樹勢ますます盛んであり、閑谷学校の歴史を見守っている。

私事で恐縮だが、筆者の祖父（細田美三郎）は漢学の教師として閑谷学校で教鞭をとっていたこともあり、筆者とはことのほか縁が深い。閑谷学校を数回訪れ、立派な学び舎とカイノキの前に立ち、歴史ある建物と「学ぶ者を励まし見守ったのであろう」カイノキの威厳に大きな感動を覚えたものである。続く

「ドラッカー現代の経営　上巻」より

序論　マネジメントの本質

第一部事業のマネジメント

顧客にとって価値は何か

第４章　シアーズ物語

◇次の戦略⇒イノベーション

膨大かつ未開拓農民市場を五つのイノベーションで開拓した。さて次の戦略はなにかが興味深い

第一期　ローゼンワールド

第二期　1920年代半ば⇒ロバート・E・ウッド

◇市場

自動車の普及により農民市場は都市市場と一体化、所得の向上により所得層の階層化から同質化へと市場変化した。

◇イノベーション

- シアーズの戦略⇒大量流通⇒通信販売から郊外型店舗小売販売への転換
- イノベーション

商品開発⇒高級品から普及品へ、

開発担当など有能な人材の育成⇒小売店店長と売場主任の不足つまり人材不足、マネジメント不足

メーカーの育成、店舗の増設

筆者の考察

◇木材業界

- 需要の変化

昭和40年代～50年代までの高度成長期、郊外に一斉に住宅建設が始まる。旺盛な需要を背景に技術ある丁寧な一戸建ての小規模の工務店から既製品的な住宅を数多く供給する建売住宅会社による住宅建設が始まり、やがて超一流会社が乗り出し金融面まで指導して市場を席巻した。

- 木材やの戦略

製材所、建材問屋、木材問屋等は木材市場、木材センターを郊外需要地の顧客である木材小売店の需要に対応すべく進出した。専門問屋を集め来場者に必要なものはすべて間に合う品ぞろえで需要に対応した。現在でも続いている。

- 木材や次の戦略は

少子高齢化社会、何でもすぐにいるだけほしい時代に入り、

需要構造は大きく変化、供給するメーカーは大型化、寡占化、需要総取りする作戦である。

材料は改質化、改良化、細分化されすぐに使えるキット化へさらに高度なものへ向かっている。

一方国の施策では、国産材の需要の開発、需要面では都市の木造化へと進んでいる。

◇顧客にとって価値は何か

「木材や」は団結し知恵を絞ってイノベーションを起こし未来の開拓を目指さなければならない。業界のイノベーションを進めていかねば。「我々木材やのすべきことは何か」皆様方とともに学び「木材や」の経営のヒントを模索していきたい　続く